

複合動詞の森

——辞苑閑話・五——

Basic Englishと基礎日本語

印欧語一般にいえることらしいが、特に英語学習の要諦は前置詞にあるという。遂に英語を使いこなすに至らず生をおえる、英語落第生の自分の経験からもそう思う。

ケンブリッジの Orthological Institute が発表した“Basic English” (1930) は、八百五十語で日常の普通のことからは表現できる、という確信をもって作られたものであった。オグデンらの強調する動詞不使用の原理にたっていることもあるが、そのほかに作用語 (operators) として補われた動詞は、come, do, get, have などの十八語にすぎない。それに対して、やはり作用語 (directive) として補っ

工藤力男

た前置詞は廿四語で、動詞よりはるかに多い。本体である八百五十語の内訳は、名詞が六百、形容詞が百五十、接続詞・冠詞・代名詞・副詞が百であった（現代英語学辞典 成美堂 1973）。

これに刺戟されて日本語にも類似の試みがなされた。よく知られたのは、英文学者・土居光知の『基礎日本語』（1933）一千百語（聞く）の重出で実数は一千九十九）である。内訳は、名詞と代名詞あわせて六百六十四語であるのに対して、動詞は七十語である。動詞志向型の日本語にしては動詞が少ない印象をうける。だが、「恐れ」「問い」「眠り」など、動詞連用形の転成名詞が百六十四語に上る。

「勉強する」のような《名詞・サ変動詞》、「恐れをなす」のような《名詞・助詞・基本動詞》でも表現できる。そして、「学び始める」のような《動詞・動詞》の複合動詞の発達が著しい。これらによっても、かなりの多くの表現が可能である。

わたしたちはその複合動詞をほとんど意識せずに言語生活を営んでいる。だが、ひとたび立ちどまって考えると、さまざまな興味ぶかいこと、不可解なことに遭遇する。

複合動詞は深い森である

東京外国語大学の留学生日本語教育センターなどで長く留学生の教育に携わった姫野昌子さんは、自身の著書『複合動詞の構造と意味用法』（ひつじ書房 1999）の「まえがき」の冒頭を、「多くの日本人は気づいていないが、日本語の複合動詞は、実に豊かでさまざまな陰翳に満ちた用法を備えている。」の一文で始めている。そして、この形態は理にかなっているが、われわれは母語になじみすぎた、その仕組みがみえないのだという。

姫野さんは続けて、最初に担当したクラスでの経験を語っている。「家の中に駆け込む」とはいえるのに、「家の中

中に歩き込む」といえないのはなぜか、と問われて立往生したというのだ。そこから始まった、複合動詞との長い格闘が本書に結実した。これは、わたしのしる限り、複合動詞を標題にもつ専書の嚆矢である。

本書以前にも以後にも、複合動詞に関するおびただしい論文と数点の著書がある。だが、その全貌はなかなか把握できない。ある角度から問題が解明されても、別の角度からみると違った疑問がわいてくるのである。複合動詞はさながら森である。しかも、いくつかの異なる樹種の森からなる深く大きな森である。一つの樹種の森について考えた結果が、他のそれらにも適用できるとは限らない。へたをすると、格闘するうちに呑みこまれかねない。

わたしも左記の二篇で数本の木と格闘したことがある。

「複合動詞論序説——とれたて・生まれたて——」（『成城国文学』廿一号 2005.3）

「立ち上げる」非文の説」（『成城文藝』百九十二号 2005.9）

詳しくかくわけにはいかないが、日本語では原則として、『他動詞・自動詞』の複合動詞は許される（例、繰りあがる）が、『意思の自動詞・他動詞』の複合は許されない。

「立ち上げる」が許されるなら、「伸び上げる」「起き上げる」「飛び上げる」も可能だということになる。「立ち上げる」は極めて特殊な条件下に発生した、鬼子の複合動詞だというほかない。

複合動詞考察の三篇めにあたる本稿では、「込む」を後項とする語について考える。複合動詞の後項としての「込む／こむ」は、原則として〈・込む〉のようにかき、他の語についても同様にする。用例には通し番号を附し、言及箇所には傍線を施す。

作り込む

初めに「作り込む」。この語に遭遇したのは四年余り前、自動車メーカーに勤務する愚息のブログ中、東京モーターショーに設定した企画の狙いを説明した箇所にあった(2009.11.9)。

1 以前はストーリーミングでの映像配信が流行ったこともあったけれども、あれだと全体の雰囲気は掴め(つか)ても、クルマのかっこ良さや細部の作りこみは伝わらない。

文脈からおおよその意味は想像できるが、初見の語だった

ので質問を送ると、返信がきた。

2 「細部まで気をつかい、こだわって制作する」というような意味合いで良く使います。「ページはできたけど、作りこみが甘い」みたいな感じで。アウディの記事にも「作り込み品質」という言葉が出てるし、かなり一般的な用語だと思います。

とあるほか、「Yahoo!知恵袋」という質問箱を参照するよ
うに、とも書いてあった。その質問箱を開いてみると、ベストアンサーが紹介されていた。即日の回答だという。

3 例えば試作品などで「この製品はもっと作り込みが必要だ」とかで使われます。この場合はもっと製品として販売するに相応しい完成度を持つていく、と理解されると良いと思います(2006.12.28)。

予想と余り違わない回答であったが、わたしの気づいた日付よりさらに三年半も早い。なお、ヤフーで「作りこみ」を検索すると、驚くべし、その時点で百二十二万余の数字があった。

日本語の辞書やいかにと、中型の辞書『大辞泉』(2005)をみると、名詞「造り込み」を掲げて、「日本刀で刀身の造形。鑄(しのぎ)造り・平造りなど。」という記述があるだ

けである。これは特殊化した語義であって、その一般的な語義を揭示しないのは辞書として怠慢ではないか。他の中型辞書を見ると、『大辞林』第三版(2006)は「つくりこみ」の項をたてない。『広辞苑』第六版(2008)は「作り・造り」の子見出しに「造り込み」を掲げ、刀剣に関する三行の説明がある。『大辞泉』と同じ特殊義である。

『日本国語大辞典』第二版(2001)以下、『日国大』と略記の「つくりこみ」は、その一般的な語義を「つくりこむ」と。仕込んでおくこと。」として、随筆「耳囊」(1984) [814] の用例「当年造込の酒三四本変りて大きな損せしと語れば」をあげている。

居体言「つくりこみ」の基になった動詞「つくりこむ」について、『広辞苑』は中世語の下二段他動詞「作り籠む」をのせるが、現代語には関心を払わない。『大辞林』第三版には左記の記述がある。

細部にわたって精密に製作する。コンピュータのシステムやプログラムなどについていうことが多い。

〔検索機能をー・む〕

当代の用法を衝いたものである。『日国大』には、四段活用他動詞として室町時代から大正期までの用例がいろいろ

ろみえる。辞書によって扱いが大きく異なる。小型辞書は紙幅がないが、中型辞書は編者の方針が反映しやすいのだろう。

とまれ、「つくりこむ／つくりこみ」は、近年、コンピュータや自動車産業などの世界で多く用いられるようになったようだ。このありようは、「立ち上げる」に似ている。あの非文の複合動詞を許容させたのは、新しいメカ、コンピュータの世界が急速に広がり、英語 *setup* に対応する日本語の動詞が至急に求められたゆえらしい。

〈・込む〉動詞の意味

思い返すと、これまでもいろいろと気がかりな〈・込む〉動詞があった。たまたま書きとめておいたものを少々、出現順に並べる。

4 何も女郎の一疋位相手にして三五郎を擲りたい事もなかつたけれど、万燈を振こんで見りやあ唯も帰れない、(樋口一葉「たけくらべ」十 1905)

5 (病み上がりの少年が街へでて)公園に、歩み込んだ。みどり色の芝生が、大きくひろがっていた。(吉行

淳之介「童謡」1961)

6 多くの先輩、友人を十五年戦争の戦陣のなかで失ってきた。良いすぐれた人間が死に、つまらぬ自分^おは生きのびた——という思いを抱いて戦後に入りこんだ。(光文社カップ・ブックス『無名戦士の手記』あとがき 1975)

7 (平成十八年に上梓した『奥会津歳時記』は) 六百余季語とやや少なめの歳時記だが、約五分の一に相当する奥会津だけの百四十七の季語を拾い込んだ。

(榎本好宏『季語の来歴』平凡社 2007 p87)

8 それぞれにちがったはずの花の絵がらもまるでおぼろで、(中略) そんなはかない影のうちでも最もはかない稲科植物の葉ずえのとがりに消えこんでいく。(黒田夏子『あばさん』文藝春秋 2013 p8~9)

これらが自分の目にとまったのはなぜか。現行の辞書数をみると、動詞の連用形について複合語を作る(・込む)の意味記述にはさしたる差がない。『大辞泉』の五分類をかりる。

A 中に入る。「風が吹き込む」「飛び込む」「殴り込む」
B 中に入れる。「書き込む」「詰め込む」「呼び込む」

C ある状態をそのままずつとしつづける。「座り込む」「黙り込む」

D すっかりその状態になる。「冷え込む」「老い込む」

E 徹底的に事を行う。「教え込む」「煮込む」「使い込んだ万年筆」

(・込む) 動詞の表わす意味を簡潔にまとめると、Aは自動詞用法・Bは他動詞用法とともに内部への移動、Cは行為・状態の持続、Dは状態の深化、Eは徹底的な遂行といえようか。そう捉えたいうえで、自分の目が上引の4乃至8にとまったのはなぜかを考えてみる。

4の「振こむ」については、このくだりに先だつ「二」に、横町と本町の少年たちの喧嘩を叙して、「万燈を振廻す」が数回みえる。すると、この「振こむ」はAかEに相当するのだろうか。5は、公園という区画に入ったのだからAであるが、どんな入りかたなら「歩み込む」といえるのか定かでない。6の「入りこむ」は理解できない。人間が生きて新しい時代を迎えることを「入り込む」と表現しうるとは思えない。7は、百四十の季語を拾って六百余の歳時記にいれたというのだからBか。

8は、二百余字で一文をなす冒頭と末尾である。初めに「花の絵がらもまるでおぼろで」とあるので、末尾の「消えこんでいく」は「花の絵がらが」に対する述語らしい。ならば、この〈・こむ〉の意味はDかもしれない。この小説自体、わたしの理解をこえた作品なのだが。

複合動詞の数

それにしても、さまざまの複合動詞があるものだ。用例を拾いながらつくづくそう思う。現代日本語にはどれほどの複合動詞があるのだろうか。

動詞本来の用法が弱まり、複合語の後項で接尾辞として用いられたばあい、例えば〈・過ぎる〉による複合動詞が辞書にのる機会はさほど多くあるまい。「言い過ぎる／飲み過ぎる／遊び過ぎる」など、いくらでも作れるからである。載録されるのはよほどの幸運に恵まれた語だろう。学校文法で助動詞とする接尾辞、受動の「れる／られる」などのついた語も辞書に登載されにくい。原則としてそれのついた語は無限に派生しうる。

かかる制約の中で、辞書に登載された複合動詞を数えた人がある。石井正彦『現代日本語の複合語形成論』（ひつ

じ書房 2007）にそえられた三つの資料の1、「既成の複合動詞」造語成分の連接表」である。石井さんは、四つの資料、『学研国語大辞典（初版）』、『新明解国語辞典（第三版）』、『岩波国語辞典（第二版）』、『国立国語研究所資料集7 動詞・形容詞問題語用例集』から、二千五百弱の複合動詞を採集した。用いられた造語成分は八百二種だという。

当面の〈・込む〉は最も数が多く、「上がり込む」「当て込む」「射込む」など百五十語である。第二位以下は、「暴き出す」など〈・出す〉の九十四語、「煽り付ける」など〈・付ける〉の八十五語、「編み上げる」など〈・上げる〉の八十四語と続く。〈・込む〉動詞の多さは突出している。上引の4から8までの用例にみえる〈・込む〉動詞のうち、石井さんのリストにのっているのは、「振り込む」「入りこむ」で、他の三つは見あたらない。これらの語がわたしの目にとまったのは、偶然ではなかったようだ。

姫野さんの著書の巻末にも「付、複合動詞リスト」があり、〈・あがる〉から〈・まくる〉まで三十三の後項による複合動詞がのっている。総数は二千四百語弱。採集方法は石井さんと異なり、小学校全学年の国語教科書（教育出版 1973）、朝日新聞と読賣新聞（1975～98）、雑誌『PHP』

(1975～98)のほか、文学作品、放送番組からも得たという。当然、辞書にのらない実際の用例が多くみられる。

姫野さんのリストから多い順に若干あげると、「あいしあう」など〈へ・あう〉の三百十九語、「あがりこむ」など〈へ・こむ〉の二百八十五語、「かいきる」など〈へ・きる〉の二百五十一語で、以下、〈へ・だす〉〈へ・あげる〉〈へ・つける〉などと続く。〈へ・こむ〉には、「累積を表す「くこむ」は代表的な語のみ提示」と注記するように、数値が絶対的な意味をもつわけではない。が、辞書掲載語を調べた石井さんの資料によっても、実際の用例を求めた姫野さんの資料によっても、〈へ・込む〉動詞は極めて多く、その組み合わせの語種も多いことがわかる。

入り込む

事例6にみた「入り込む」について考える。

作例「天窓から雨が入り込む」と表現される事態は、〈へ・込む〉のない「雨が入る」だけでも表現できるが、〈へ・込む〉がつくと特別な暗示の意味(コノテーション)が加わる。例えば「一斥候が軍陣に入り込んで攪乱した」は、ほぼ中立的な記述と解釈できる。が、書き手・読み手がいず

れの側の者かでコノテーションは大きくかわる。斥候の側の者なら好ましい事態、反対側の者なら好ましくからざる事態と感ずるだろう。〈へ・込む〉の使用には慎重でなくてはならないと思う。

わたしが〈へ・込む〉に違和感を覚えた、一著者による実例三つをあげる。

9 (明治維新、東京周辺の県から流入した) これらの人たちの職業は多種多様であったようだ。商人として入り込んだものもあり、(『話し言葉の日本史』コトバ

吉川弘文館 2011)

10 キリシタン資料とは、室町後期に日本に入り込んだイエズス会宣教師らによる「辞書・文法書・リレー読本」などの言語資料である。(同 p.164)

11 (巨大な人口空白地になった) 武家屋敷に新政府の官吏が入り込むことがあったとしても、(括弧書き省略) 明治初年の東京山の手は、荒蕪の地と化したのである。(同 p.200)

この語感には自分だけのものではない。姫野さんも、〈へ・込む〉類の複合動詞の章のまとめに、それを次の四つの「ニュアンス」としてあげている。

- a 全体がすっかり奥深く入ると感じるがある。
- b いったん入ったら動かないという固定感がある。
- c 予期せぬものが入るという抵抗感がある。
- d 人の行動を表す場合、意思性や目的意識が強いという感じがある。

9・10・11にわたしの語意識が反応したのは、このb・cゆえだと思う。日本語の歴史に関する研究者の著述なのだから、特に10などは客観的にかくべきではなからうか。

月刊の総合誌『選択』の連載「宮中取材余話」⑮に次の叙述がある。

- 12 宮内庁幹部の中には「番組に度々コマーションが入り込み、芸能タレントがナレーションをするような民放に両陛下下の映像を提供するのは気が進まない」という人もいる。(2009.11 p.89)

これは「ニュアンス」cの例である。

名古屋本社版『朝日新聞』、東海経済の面に「ビジネス交差点」がある。その中の記事に、

- 13 国内の主要観光地の表情はいまひとつさえない。景気回復の中にあっても、観光客の入り込みが依然低迷しているからだ。(2007.6.24)

があった。JR東海相談役の談話を記者が文章化したものらしい。記者は、この「入り込み」を、どうよみ、どう理解せよというのだろう。のちに、教育テレビの高校講座「地理」の「余暇と観光産業」の回で用例14に遭遇した。

14 「観光入込客数」(2010.7.14)

東京のお台場らしい商店街を映した場面の字幕の文字である。首都大学東京の某先生はこれを「イリコミ」とよんだ。観光業界用語らしいが、しろうとは難しい。

〈・込む〉動詞いろいろ

取りあげたい語はなお多いが、すでに多くの紙幅を費やした。以下、若干の語に絞る。

前節の「入り込む」に似た用例の多い〈・込む〉動詞に「映／写り込む」がある。朝日新聞東京版の「泉麻人の東京博物館」は、昭和年代の新聞の記事や写真を考察する、わたしの好きな連載であった。その一篇「一九六二年 東京アルバム」①の「東京スタジアム」。

- 15 この記事写真で見逃せないのが、スタジアムの背景に写りこんだ「お化け煙突」。千住桜木町の火力発電所に立っていたもので、(2006.2.26)

「写り」にあえて〈こむ〉をそえた意図は不明である。このたぐいは、いま氾濫している。

インターネットの百科事典『ウィキペディア』には、さらに理解に苦しむ例がある。

16 京都の旅館のシーンにおいて、笠智衆と原節子が枕を並べて眠っていると、一瞬床の間に置かれた壺が写り込むカットの意味(映画「晩春」)

小津安二郎の映画のこの場面について、ヨーロッパの人は近親相姦の含意と解釈するというのだから穏やかでない。演出者の意図は何だったのだろうか。

時に正統法の用例にあらうとうれしい。例えば、東海テレビの番組「ニュースJAPAN」の特集「警鐘 肺がんX線健診の限界」(2010.11.30) からメモした文言である。

17 肋骨、鎖骨、血管、心臓などが写りこみ、その陰になつて癌は発見できなかった。

『朝日新聞グローブ』の最新号「むしにまなぶ」(2012.2)の「虫に学んだ主な技術」にもある。蛾の目の構造を利用して、光の反射を防ぐフィルムを実用化したという記事の説明に、

18 室内の照明の映り込みが少ない液晶テレビ画面な

どに応用されている。

暗示的意味cの例である。〈こむ〉動詞は、17・18のようにこそ用いるべきだ、とわたしは考える。

用例4は、『日国大』が他動詞①の用例の第一にあげているが、初出が明治期というのはいささか不審である。この複合動詞前項の「振る」は基本動詞と称すべき語で、同辞書はその意味を廿一にわけて記し、その⑥を「みこしを勢いよくかつぎ動かす。神輿・神宝などを荒々しくかつぐ。」として平安時代の用例をあげている。『たけくらべ』の用例は、その神輿を「万燈」に替えたものではなからうか。意味はEとすべきだろう。

「指定された口座に振り込む」の意味はB、「イチロー選手は八十本をふりこんだ」ではEであろう。Eの類は自動詞による「走りこむ／滑り込む」、他動詞による「投げ込む／打ち込む」と多く、後者は「三十球を投げこんだ」のように、概して両義的である。

経済報道、中でも株価と外国為替のレートには「割り込む」が全盛である。株価は千円刻み、為替レートは十円刻みで基準を設定し、それを下回ると、変動の幅に関わらず、必ず「割り込む」という。その単純化は、ある意味で

は明快だともいえる。

一方、明確な基準のない数値の低落は、ほとんど「落ち込む」と表現される。挙例にいとまがないが、朝日新聞の「G8財務相会合」の記事(2006.9.14)からひく。「米国も4月の鉱工業生産指数は0・5%減と落ち込みの度合いは和らいだ」、「ユーロ圏16カ国鉱工業生産は1・9%減と8カ月連続の大きな落ち込みだった」、「成長率の落ち込みが大きいラトビア」。真に落ち込んだのはどこなのだろうか。この冬、米国を襲った寒波について、一月八日十九時のラジオのニュースでは、マンハッタンの気温を「氷点下十五度まで落ち込み」と報じた。これは廿二時のニュースでも同じであった。

その他動詞形「落とし込む」にも流行の兆しがある。オーケストラ指揮者が「得た知識をもう一度自分の中に深く落としこみ」、日本語学者が「作り出された言語資料を(中略)抽象的な言語システムおよび言語史に落とし込んでいく」とかいている。後者に接したとき、同業者の末席にあるわたしは実に憂鬱であった。

生成無限

姫野さんが最初に担当した教室で、「歩き込む」を非文と学んだ留学生なら、用例6はどうかと問うに違いない。現にそうした実例も多いからである。作家たる者、既成の語では表現しえないという思いがあるのか、時にそうした造語を行う。

石井さんの著書の巻末にある資料2は、「新造の複合動詞」一覧である。二十世紀、泉鏡花から原田宗典まで、小説を主とし、若干の随筆・評論などから、辞書にはとられなかった五百十九語をのせている。多くは、簡潔さを求めるゆえに一語化を急いだ結果なのだが、あえてそうした表現を用いて独自の文体とする作家もある。(・込む)動詞など三つをあげる。

19 家を引越歩いても面白くない、(田山花袋「蒲団」1907)

20 大型ポスタアが、そこに集り散る群衆の眼を牽いていた。(井上靖「闘牛」1939)

21 犬が(鼠を)押さへくわえこんで(野坂昭如「死児を育てる」1969)

この一覧に、5・7・8の複合動詞は見あたらぬ。

人間は言語を操る動物である。だが、もはや新しい語根を作ることはできない。その語根を操作して複合語や派生語なら作ることができる。それこそ言語を操作するホモ・ロクエンスの特権だといえるかもしれない。かくて複合動詞の森は、確実に広がり、深まることだろう。

接辞は、使いなれるにつれて意味が意識されにくく、接辞としての機能をはたさなくなる。その点に関してわたしは二篇の論をかいた。

「接辞の陥穽——日本語雑記・八——」〔成城文藝〕二百九号 2009.12)

「字音接辞〈化〉の論」〔成城国文学〕廿八号 2012)

本稿を書き進めるうちに、これは「陥穽」ではなく「宿命」なのだ、と考えるに至った。

わたしの目についた究極の複合動詞は、雑誌『選択』(2010.6)の論説「中国のゲオポリテイク」にあった。

22 ロシア極東部に溢れ込む中国人 (p.7)

〈・込む〉は遂に外部への動きをも表現するに至ったのだ。書き手は反論するだろうか、そうではない、意味Dの用例であると。

(平成廿六年三月六日啓蟄)

附記 成稿直前に、影山太郎編『複合動詞研究の最先端

謎の解明に向けて』(ひつじ書房 2013.12.26)を手にした。

発行日は前年末とあるが、わたしの手が届いたのは二月末であった。十五篇の論文の中に、山口昌也さんの「複合動詞「〜込む」と前項動詞の格関係——『複合動詞用例データベース』を用いた分析——」がある。Webから半自動的に構築した『複合動詞用例データベース』によった論文である。対象とする「〜込む」は、一千以上の用例をもつ百四十語だという。ビッグデータを処理した論文で、拙稿とは方法も視点も異なるものである。

前稿「さまよえる〈憂い〉」の補足

そこにあげた北原保雄さんの説は次の二論文にみえる。

「形容詞のウ音便——その分布から成立の過程をさぐる——」

〔國語國文〕36.9 1967)

「形容詞「ヒキシ」攷——形容動詞「ヒキナリ」の確認——」

(同右 37.5 1968)